

English in Action 完成にあたって

久埜百合（「ぼーぐなん講座」より抜粋）

1980年秋も深まる頃に書き始めたこの教材が、いよいよ子どもたちの、そして先生たちの手に渡ることになった。私が小学生に英語を教えてきたこの30年間に、あれころと比べ、あたためてきものを80回のレッスンにまとめたものである。子どもたちの厳しい目に晒されるのを楽しみにしている。

◆日本の子どもたちにふさわしい教材を

私をはじめ子どもに英語を教え始めた頃は、「読めるのに使えない英語」の授業に声高な批判が出てきた時で、子どもには苦勞させたくないと思覚めた親たちの間で、少しでも早く英語を習わせたいという気運が盛り上がっていた。しかし、日本人の手に入る教材は極めて少なく、アメリカなどで第二言語として移住者を対象に用いる教材が日本の洋書取扱店に並んでいる状態であった。そのような教材を日本の子どもたちに与えながら、日本の文化的背景になじまない内容に不満を持ち、日本で育っていく子どもたちにふさわしい教材を作りたいと願うようになった。また、この30年の間には、特にアメリカを中心に言語習得理論の発展はめざましく、リスニングに重点を置く教授法の開発も行われた。これは私たち教師が経験的にもっている子どもの英語の習得過程を裏付けるものであり、心強い支えともなった。同時に、「役に立つ英語」を「早期に」という欲求は強まる一方で、それに伴って、よりよい教材をよりよい教授法でという関心もいよいよ高くなってきた。この様な時期に *English in Action* を世に問うのは、大変にチャレンジングなことである。

◆制作時に留意した点

この教材を作るにあたっては、

1. 子どもの精神的発育段階に合った状況設定をする
 2. 内容が楽しく、子どもが意欲的に自分のことについて表現したくなる
 3. 英語で語られたものを聞いて理解することをレッスンの基本とし、理解したものを繰り返し練習し定着させ、応用発展できるように導く
- という点に留意した。

また内容は、

1. 子どもがイメージをはっきり描きやすいストーリー性のあるものにする
2. リズムやイントネーションを把握し易い英文にする
3. 音声中心のドリルを、早口ことばや歌・ゲームを豊富にして楽しく行う
4. 国際化の時代にふさわしい、広い視野にたった内容を言語材料に選ぶことに決めた。

◆中 2 前半の文法もカバー

具体的なイメージをしっかりと捉えさせるためには、対応する日本語、即ち「訳文」を与えるかわりに、状況を十分に説明する絵を豊富にした。その絵からのヒントを得て、子どもたちは想像力を逞しくし、もっとイメージを膨らませてくれるに違いない。そのイメージが英語の音としっかりと結びついた時に、その英文の文法構造も定着し、応用発展につながるものと考えている。

教室に集まる児童は 5 年生を中心に、4～6 年生と考え、レッスンの終わる頃に、子どもたちも小学校を卒業、中学生になろうとしていることを前提に文法内容を構成した。従って、極めてやさしい初歩的内容から入って、全レッスンを終わるまでには、大体中学 2 年生前半の文法をおさえられるようにした。そして各レッスンとも学習する文法事項は、1 乃至 2 項目として明瞭に配列し、子どもも教える先生も、何を学習しているか要点がわかりやすいようにした。

◆楽しくやれる家庭学習

先生と子どもたちが努力して学習効果をあげていく時に、家庭の協力があれば“鬼に金棒”である。そのために、楽しくてゲーム的なクイズを中心に構成したワークブックを家庭学習用に与え、いつの間にか学習を重ねられるようにしてある。

◆目的を明確にした主教材

1 レッソンは 6 ページからなり、第 1 ページの導入部でそのレッスンの学習内容を紹介し、次の 2～4 ページで応用発展させ、5～6 ページは、そのレッスンに合ったゲーム、早口ことば、詩、歌などを盛り込んだ。各レッスンの学習目標をはっきりさせ、子どもも先生もその目標に向かって努力しやすくし、又、その後続くレッスンでも自然に反復練習が出来るようにして、学習事項が定着するように配慮した。内容が子どもの興味をかきたてる、明るくて面白いものであることは不可欠の条件である。又、絵を見ながら CD を聞き、先生が話しかけるのを聞いていると、内容のイメージが浮かび、ストーリーの展開についていけるようにすることも必須の条件とした。

◆音声面も重視

児童期の英語学習が青年期以降と違って効果をあげるのは、特に音声面の学習効果が著しく、定着度も高いからである。リズムやイントネーション、及び、各音素の聴解・口頭練習を全レッスンを通して大切に扱いながら学習を進めるべきである。極言するならば、英語の音をきちんと教えないで、単語や文の意味を日本語で理解させていくような学習をするのだったら、児童期の英語教育の目的は半分も達せられないと考えている。それ故に、短く簡潔で、やさしい文章を用い、リズムをはっきりさせ、反復練習が楽しく出来るように留意した。こうして英語の音を耳や口だけでなく身体全部を使って、文字通り“体得”して、中学以降の英語習得の基礎を作れるように子どもたちを励ましてやりたい。

第 1 期（1 冊目）の学習目標

1. 子どもの日常生活を中心に、身近かな単語を増やししながら、
2. 英語の音とリズムに身体を慣らして、
3. ごく簡単な文で自分の周辺のことを言えるようにすることである。

◆口頭練習より、「聞いて理解する」訓練を

口頭練習にいきなり入るようなことは厳に慎み、テープを「聞いて理解する」訓練を大切にしたい。英語の音の連続から意味を把握することを、勉強の第一の段階とし、その内容をイメージ化してから口頭練習に入るべきである。口下手だったり、物真似をするのに抵抗のある子は尚更である。無理をして口頭発表をさせていると、いつまでも日本語音の影響が強く残るので、口頭練習の強制は禁物である。正しい音を素直に聞きとれる子は、やがて素晴らしい発音で話しはじめ、私達を驚かせるに違いない。会話、お話、詩、歌等の教材の学習中、無理に暗記させたり、文法事項を定着させたりする必要はない。数ヶ月後に同じ文型で復習できるようになっており、繰り返し楽しみながら反復しているうちに、知らぬ間に身につくはずである。

◆“書く” ことについて

学習中に書く練習をする指示はあるが、極めて簡単なものなので子どもの負担になるものではない。彼等は文字への関心が高く、書いてみたいという意欲があるとはいえ、スペリングを覚えたり、一字一字を単語として識別することへの興味とは一線を画する。英文の読み書きに対する関心はまだ低いといってよい。4 技能のバランスを、中学生以降の学習における 4 技能のバランスと同じに考えず、それぞれの発育段階に合わせて考えるべきである。

第 2 期（2 冊目）の学習目標

1. 英文の骨組みの基本型に触れさせる

先ず、文の主体である主語になる語、即ち、I, You などにはじまる代名詞を、しっかり身体で覚えさせる。動詞は、be 動詞と have 動詞が中心である。第 3 人称と複数の人称にも慣れたところで、this などの指示代名詞を導入し、“何が、どうする” という表現を習得させる。

2. 基本型を用いた疑問文も経験させる

“何が、どこで、どうするの？” という発話に必要な最小限度の道具＝疑問詞 Who, Where を与え、自分から英語を話しかけられるようにする。このために、前置詞も同時に導入する。

3. 子音を中心に、個々の音と文字の関係を理解させながら発音練習をする

早口ことばや詩の暗誦を楽しみながら練習する習慣をつけ、レッスン40までの学習の基礎とする。

4. 英語のリズムやイントネーションを崩さないように注意する

学習する英文は簡単でも、イントネーションの微妙な違いで、いろいろニュアンスの異なる表現も可能である。やさしい文を使いながら、日本語と異なるリズムとイントネーションを、この時期にしっかり身につけさせたい。

第3期（3冊目）の学習目標

第2期において、代名詞を中心に主語をしっかり捉えながら、英文を聞き、理解し、自らもそれらを使いわけて発話できるような練習をしてきた。それに平行して音声訓練もし、文字にもだいぶ慣れ親しんできたと思う。

第3期では、それを踏まえて、形容詞と動詞を中心に単語を増やし、子どもたちが見たもの、手で触ったもの、心で感じたことを自由に表現できるようにしてあげたい。今まで大体4語文が多かったが、形容詞が加わると5~6語文になって、1つの文のフレーズが増えることになるが、こうして少しずつ長くなる英文を聞いたり、読んだり、暗誦したりしても、そのリズムに抵抗なくついていけるように発話練習を十分行いたい。

1. 形容詞の語彙を増やす

最初の1ヶ月位で、反対語と対比させながらいろいろな形容詞を用いた表現に慣れ、比較級と最上級の簡単な表現にも触れて、身近かにあるものの形態について話せるようにする。

この段階では、子どもたちが慣れ親しんでいるbe動詞の文型を使う。

2. have 動詞の復習と応用発展

Have 動詞の人称に伴う変化に対する導入は、極めて早い段階に行ったが、加えて、否定文と疑問文においても、この動詞の変化に慣れさせる。学習したばかりの形容詞も使って、音声を中心にした学習を繰り返すと、かなりの定着を図ることができる。

3. 動詞の語彙を増やす

命令文を中心に、身振りをつけながら日常の動作を英語で表現できるようにし、その否定文と疑問文の表現にも慣れさせる。

現在進行形を用いた表現は、子どもがその動作のイメージを捉えやすいために定着度が高いので、ゲームなどをしながら学習する。また、“want”を用いて不定詞の名詞的用法にも触れておく。

4. Wh-questions の復習と応用発展

疑問文を使えるということは、子ども自らが話を切り出すことができるということである。平叙

文だけでは、質問されないと話始める訳にはいかず、いつも受け身に廻る。疑問詞を用いた疑問文を上手に操れるようになれば、積極的に子どもの方から話しかけることができ、英語を使う楽しみも増えるだろう。

5. 子音の発音練習

テキスト②で始まった子音の練習は、一応テキスト③でしめくくり、テキスト④では母音に重点を置く。日本語にはない音の発音を、先生も子どもたちと一緒に楽しんで練習してほしい。そして、それらの音と文字の関係にも気づかせておこう。

第4期（4冊目）の学習目標

概して、第1期には名詞中心、第2期には主語となる名詞や代名詞を中心に、第3期には形容詞と動詞中心に前置詞なども用いて語彙を増やし、英語による表現を習得してきた。第4期には、それらを踏まえた上で、もう少し難しい英語の‘しくみ’に触れ、表現をより豊かにしていく。

1. 英文のもっと細かい表現を可能とするために、動詞の時制を変化させ、過去形や未来形を導入し、また助動詞も加える。
2. 子どもたちが既にイメージとしてはっきり持っている童話を用いて、少し長いお話を英文で聞き、読み、語るにより、英語の運用のおもしろさを経験させる。
3. 第3期までは子音を中心にした発音練習を、第4期では母音を中心に行う。日本語のみならず、多言語と比較しても英語は母音の種類が多く学習者をてこずらせる。2重母音を例にとっても、日本語音が干渉してなかなか身につかない。決して十分な練習量ではないが、日本語の音とは違うことに気づかせるだけでも意味がある。
4. リズム、イントネーションの学習を、このアクションコースの重要な柱の一つとしてきた。第4期では、暗誦する詩や早口ことば、歌なども長いものが増えてくるが、リズムを崩さないように注意しなければならない。各レッスンの物語も、相手に意味を十分伝えられるようにイントネーションを大切に、“語る”ことを目標して学習する。すなわち単語のアクセントだけでなく、文中のストレスも正確に学習することによって、自然に英文のリズムを身につけさせたい。また、イントネーションの微妙は変化によっても意思伝達ができることを同時に体得させたい。

◆再確認したい、児童英語教育の目的

私たちが児童期の子どもに英語を教える目的は、10歳前後の子どもにはあるのに、中学以降には急速

に低下してしまう「英語に直接鋭敏に反応する能力」を、できる限り伸ばすことであり、それに尽きると思う。そのためには、不用意に英語のしくみについて教えようとしたり、日本語との対応に時を過ごしたりしないことである。中学で学習するには遅すぎることを、少しでも多く、身体すべての機能を使って学習させることに集中し、中学での学習領域に踏み込まないことである。

◆土台作りに撒する

全コースを通して、大体中学 1 年から 2 年の前半の文法事項を学習することになっているが、学習した子どもたちが中学で改めて学習する英語をつまらなったり、授業を軽んじたりすることのないように配慮することも大切だと思う。中学の学習の前半で子どもたちが経験する落とし穴があるとすれば、

1. 単数・複数、あるいは人称による変化も含む英単語の綴り
2. 動詞を中心とする人称の変化、have 動詞と be 動詞の運用（例えば疑問文）の相異
3. 動詞の時制による変化（綴りも含む）
4. 冠詞の正しい運用

などがあげられる。これらは理屈抜きで体験させ、中学での学習の土台を作ることに撒してみたい。